第二章　東広小路（ひろこうじ）賭け矢

一

安永（あんえい）元年も残りの３日、坂崎磐音が鰻屋の宮戸川（みやとがわ）で大掃除の仕事をもらった。

親方の鉄五郎が鰻裂きの松吉を使いに寄越したのだ。

「怪我をしたからって、何も遠慮することはねえじゃありませんか」

「仕事をできぬに顔を出すわけにはできません」

「金兵衛さんに聞いたが、内藤新宿まで仕事を探しに行ったってね。呆れたねえ、命を張ったってのに、お侍三人の懐に残ったのはたったの二朱ですかい」

「金を稼ぐのはなかなかむかしいものですね」

「おめえさんと話していると、年の瀬（としのせ）だということを忘れそうになる」

と苦笑いした鉄五郎が訊いた。

「怪我の具合はどうですか」

「もう大丈夫です。年明けからは働かせていただきたい」

「こう押し詰まる（おしつかる）と鰻屋は客が少ないが、さし当たって（さしあたって）今日は、包丁なんぞを研いだり（とぐ）店の掃除をしたりして、いくらか小銭を稼ぎなせえ。飯だけは三度三度食い放題だ。」

「いや、助かりました」

新宿から戻って腹を減らす日々が続いていたのだ。

鰻裂きの同僚の松吉と次平（じへい）と組になって二階から掃除を始めた。

天井や壁の煤（すす）を払い、畳を上げて北の橋に日干し（ひぼし）にして竹の棒で叩く。

「おや、浪人さん、鰻裂きから掃除やに格落ちかい」

鰻を宮戸川に持ってきた幸吉（こうきち）が声をかけた。

「年の瀬は鰻より蕎麦だそうだ。それでも親方が掃除の手伝いでもしろと雇ってくださった」。

「新宿は稼ぎにならなかったってね」

誰から聞いたか、すでに幸吉は知っていた。

「ああいうのを**骨折り損（ほねおりぞん）**の**くたびれ儲け**というのであろうな」

「品川の次男坊は、小梅村の川で尻をからげて蜆（しじみ）採りをしていたぜ」

「品川さんは蜆採りか。来年になれれば風向きも変わろう、それまでの辛抱だな」

「独り者は呑気でいいな。うちみてえに家族が多いと一日一日が死にもの狂いだぜ」

「幸吉どのは顔が広い。それがしにできる仕事があれば何ぞ紹介してもらいたい」

「待てよ」

幸吉が言った。

「何か心当たりが…」

「浪人さん、何でも遣るいい」

「お上の定法に触れぬことなら、何でもやらせてもらおう」

「待ってな。ちょいとたしかめてくらあ」

そういったときには幸吉はからの竹籠（たけかご）をかたかた鳴らして走りだしていた。

磐音はまた畳の埃を叩く仕事に戻った。

十一歳の子供の言うことを真に受けたわけではないが、磐音はなんとなく幸吉が再び顔を出すのを気にかけながら二階から階下と掃除を終え、昼下がりには店中（みせじゅう）の包丁を裏庭に集めて、丁寧に研いだ。

一時半（いっときはん）ばかりかけて刃物も研ぎ上がった。

そろそろ夕餉の刻限だ。

そんな頃合い（ころあい）に、裏木戸（うらきど）から幸吉が顔を出した。

「仕事を見つけて来たぜ」

と得意そうな顔をした。

「本当か、幸吉どの」

十一歳の子供とはいえ、幸吉は出会った時から本所深川の師匠のようなもの、頭が上がらない。

「嘘言ってもしょうがないや。両国広小路の楊弓場だ」

「矢場のことかな」

「他に何がある。相手はすぐに会いたいと言っているんだ、行くぜ」

幸吉がポンポンと言った。

「ならば親方にお断りして参ろう」

幸吉を待たせて店の台所に入っていった。すると親方の鉄五郎が、

「おかげで家中（うちじゅう）がさっぱりしましたぜ。夕餉には酒をつけましょう。」

と言ってくれた。

「それが…」

磐音は幸吉がもたらしてくれた話をした。

「両国橋際の矢場ですかい」

鉄五郎は裏庭に出ると幸吉に

「幸吉、坂崎さんに何の仕事をさせようというのだ」

と問い質した。

「親方、怪しい仕事じゃないぜ。近頃、楊弓場を荒らし回る男たちがいてさ、けっかいとかいう賭け矢を申し込んでよ、楊弓場から金をふんだくっていくと聞きこんだからさ、どこぞの楊弓場に用心棒はいらねえかと訊いて回ったんだ。そしたら、東広小路の金的銀的の朝次親方がさ、いいだろう、腕がいいなら連れてこいと言ってくれたんだよ。」

「金的銀的がな」

と納得した鉄五郎が磐音に

「話を聞く分にゃあ損はありますまい。折り合いがつかなきゃまた戻って来ればいい。」

と送り出してくれた。

磐音と幸吉は**暮れ初めた**（くれそめる）堀沿いに竪川に出た。それを大川へ下り一つ目の橋を渡った。すると両国広小路の喧騒が川風に乗って聞こえてきた。

明暦三年の大火の折、大川の西際（にしぎわ）で十万余人（じゅうまんよじん）の死者を出した。

そこで幕府で寛文（ひろふみ）元年に大川を結ぶ橋を架けた。

これは両国橋である。

発端（ほったん）は発端、東西（とうざい）の橋際に火除け（ひよけ）地を広く設け、両国広小路とした。

東詰の広場では背後に回向院（えいこういん）を控え、昼前は葛飾（かつしか）や小梅村など近在の百姓衆が野菜物（やさいもの）を持って集まり、青物（あおもの）市場が立った。昼からは市場のあとをきれいに片付けて、小屋掛け（こやがけ）の見世物が客を呼び集めた。

一日中、人の往来が絶えないところが両国の広小路である。

金的銀的は小屋掛けではなかった。

東詰の水垢離場（みずごりば）前に間口（まぐち）五間の矢場を構えていた。

障子（しょうじ）に金的を射抜く（いぬく）当たり矢が描かれ、島田髷に黄八丈（きはちじょう）をぞろりと着た矢場女、矢返したちが四、五人もいた。いずれも若くて見栄え（みばえ）もいい。

客が三人、二尺八寸ほどの半弓（はんきゅう）を引いていた。

なかなか本格的で、八間ほど先に土塁（どるい）が設けられ、大小の的が並んでいた。

一尺ほどの短矢が当たると若い女が太鼓を叩いて、

「当たり！」

と叫んだ。

どこかのどかで、殺伐（さつばつ）とした風はない。

「女将さん、連れてきたぜ」

店でただ一人の年増女（としまおんな）だ。

「親方なら水垢離（みずごり）場で煙草を吸ってるよ」

と教えてくれた。

両国東広小路の水垢離場は、大山参りに行くものたちが斎戒沐浴（さいかいもくよく）して身を清める（きよめる）ところだ。

暗がりの中、蛍のようにぽっぽっとした火が見えた。

親方の朝次はどこからか帰ってきたようだ。

「親方、この浪人さんだ」

暗闇から磐音を観察している様子が窺われた。

「金的銀的の主の朝次です、金兵衛長屋に住まいだそうですね」

丁寧な口調は大家の金兵衛を承知している様子だった。

「夏から世話になっております」

「あなたの人柄と腕前は今、金兵衛さんに聞かされてきました。うちじゃあ、ちょいと…」

「親方、浪人さんの腕じゃ、物足りないというのかい」

「幸吉、早とちりするな。うちのような商い（あきない）では、坂崎様の腕前は立派すぎると言っているんだ。」

「親方」

磐音が話しかけた。

「金兵衛どのと話されたのなら、お分かりでしょうが、火事の後始末などをして日傭取り（ひようとり）をしていたのです。どのような仕事でもいたす所存（しょぞん）にござる。

相手はしばらく沈黙した。

「仕事のことは幸吉からお聞きですか」

「矢場を荒らす者たちがいるということにございますな」

「小屋掛けから常設まで、矢場は派手なようですが、三十本六文の商いですよ。矢返しの女を雇い、三十本も矢を射たれて六文では成り立ちません（なりたつ）。そこでお上には内緒の賭け矢をどこもが行います。ご存じですか。」

「残念ながら矢場に出入りしたことはござらぬ」

「ならば説明いたしましょうかな」

結改（けっかい）という競射（きょうしゃ）の矢数（やかず）は二百本、もともと遊びだった。

それが一文を紅白の紙に包んでの賭け矢になった。

今では一本いくらの裸銭（はだかぜに）で矢場と客の双方が弓を引いて、その二百本の差額で競ったり、二百本の勝ち負けで客か店の総取り（そうどり）勝負になるという。

「秋口から浅草当たりの矢場に出没し始めたのは、女を含む五人組です。若衆（わかしゅ）姿の優男（やさおとこ）が頭分で、美形の女、隠居風の爺様、無精髭（ぶしょうひげ）の浪人に、どこぞのお店者といった風情（ふぜい）の男の五人連れで、一人か二人でふらりと矢場に現れては、賭け矢を挑むようになりました。それがまた見事な腕前だそうで、二百本のうち外すのはせいぜい五、六本、浅草門前の大文字矢の大勝負では、女が二百の総当りを出したそうです」

「大勝負と申されたが、賭金はいくらですか」

「大勝負となればまず五十両」

「なんと…」

磐音は絶句した。

「川向うでだいぶ評判が立っているらしく、富岡（とみおか）八番宮か東広小路にやつらが稼ぎ場所を移してくるという噂が立ちまして、東広小路にある十三軒の矢場が何度か会合を持ったところなんで」

「断ることはできないのですか」

「江戸っ子ってのは困った性分でね、客に勝負を挑まれれば受けて立つ」

「対策は決まっておらぬのですか」

「議論百出といえば聞こえはいいが、まとまりがね**ったらありゃしない**。私としては十三軒が纏まるのが一番だと思っているんですがねえ」

そう嘆いた朝次は煙管（きせる）をぽんと手のひらで叩いた。すると燃え残った煙草の火が水垢離場に飛んで。

じゅっ

と音を立てて消えた。

「川向うでは何軒もの矢場が奴らのために潰れています」

「主どの、それがしは何をなせばよいのですか」

「厄介なことに、五人組は腕が立つらしい。浅草の一軒が用心棒を雇って、帰り道を襲わせたそうな。ところが反対に若衆（わかしゅ）の優男（やさおとこ）に斬られて、一人が死に二人が大怪我を負った。**こちとら、ご禁止の賭矢をやっている手前、町方にも届けられないでいる**。そこで、先ほどから話しながら思いついたんだが、十三軒が纏まって、坂崎さんを雇えないかと考えているんでさ。」

「賭矢に勝って帰る五人組をそれがしに襲えと言われるのですか」

「そんなことはできっこありませんよ」

朝次が声もなく笑った。

「さっきも言ったが、端から断るのが一番だがそうもできない。一度目の負けはしょうがない。奴らの足代（あしだい）だ。だが、二度目はごめんだ。奴らにもう二度と東広小路で仕事をしないでくれと私の方から頭を下げようと思う。この際、面子なんて構ってられないからね。その時、私に付き添ってもらえませんかね。」

「承知いたした」

「問題は給金だ。立派なお侍に何百文なんて話はしたくないが、いつ来るとも知れないやつらを待ち受けるんだ。十三軒から五十文ずつ出せば一日六百五十文、あいつらとやり合うときは特別手当を出しましょう。それでどうですね。」

一日六百五十文は、職人の手間賃と同じくらいだ。

「結構です」

「ならば今晩から付き合ってもらえますかね」

磐音はありがたく受けると、

「幸吉どの、助かったぞ」

と幸吉に頭を下げた。

矢場の裏手に小さな休所があった。

矢返しの女達が時折煙草を吸ったりなど息抜きに来る。

部屋には火鉢（ひばち）に炭がいけられ、薬缶（やかん）がかかっていた。床の隅には女たちが食い散らかした蕎麦の丼や茶碗が積んであったり、灰で汚れた煙草盆や表紙の黄ばんだ絵草紙があったりした。

若い女たちが出入りするだけに、脂粉（しふん）の香りが充満した（じゅうまんする）して息苦しいくらいだ。

磐音はまず格子戸（こうしど）を開いて、部屋の空気を入れ替え（いれかえ）、汚れた丼や煙草盆を部屋に隣接した狭い台所に運んで洗った。さらに、先のちびた箒で掃き出すと、だいぶさっぱりした。

大包平を部屋の壁に立てかけ、格子窓のそばに陣取った。

「おや、部屋が見違えるようにきれいになってるよ」

矢返しの女が二人、部屋の入り口で目を丸くした。

「お侍さん、お前さんがやったのかい」

姉さん株のおんなが訊いた。

「気に障ったら許してくれ。暇でな、つい手を出した。」

「部屋をきれいにしてもらって誰が怒るものかね」

大柄な体格の姉さんが火鉢の前にべたりと座った。二十一、二か。

もうひとりの小柄な娘は十七、八か。

磐音は火鉢の薬缶（やかん）から急須に湯を移しながら、

「それがしは坂崎磐音と申す、よしなに頼む」

と頭を下げた。

そりゃどうも、と慌てた姉さんが、

「あたしはおよしでこっちがおうめちゃん」

と名乗った。

「無調法だがどうぞ」

磐音が淹れた茶をおよしが受けながら、

「旦那に用心棒を雇ったと聞いたけど」

と笑った。

およしが煙管（きせる）を出して刻みを詰めた。

磐音が煙草盆を差し出した。

「なんだが吉原の花魁になった気分だ、落ち着かないよ」

お良がケラケラと笑った。

「坂崎さんは浪人なの」

「半年ばかり前に禄に離れた。なりたてだ」

「どうりで能天気だ」

「いや、これでもいろいろと苦労しておる」

内藤新宿に仕事を求めて行った顛末（てんまつ）を、差し障りのないように変えて話し聞かせた。

「ええっ、男が三人も内藤新宿くんだりまで行って、懐に残ったのが二朱足らずなの」

「三人で分けたら百七十文足らずでな、一日持たなかった」

「呆れたね」

おうめが黙って磐音に紙包みを差し出した。

「薄皮饅頭の残りだけど食べますか」

「ありがたい、夕餉を食いはぐれてな」

磐音は包を押しいただき、茶色の皮が固くなりかけた饅頭を口にいれた。

「おっ、これはうまい」

娘二人は幸せそうに饅頭を賞味する磐音の無邪気な顔を眺めやって、

「こりゃ、**どこぞのぼんぼんか、偉い食わせ物だ**よ」

と、お良がおうめに囁いた。

煙草を吸ったおよしとおうめが矢場に戻ると、入れ替わりにおたつとおきねが顔を見せた。二人とも十七、八だ。

おたつは丸ぼちゃ、おきねはうりざね顔の美人だった。

「あたしたち、偉くなったみたい」

おたつとおきぬは身をよじらせてけらけら笑った。すると若い娘の香りが狭い部屋に漂った。

「お侍はどこに住んでるの」

おたつが訊く。

「それがし、坂崎磐音と申して、深川六間堀町の金兵衛長屋に厄介になっておる」

「なんだ、うちと同じご町内だ。」

と言ったのはおきぬだ。

「あたし、猿子橋際の唐傘長屋」

「おうおう、天気ならば堀端に傘が干してあるところか」

「それそれ。金兵衛さんの子供の時から怒鳴られながら育ったわ」

と笑ったおきねは、

「うちのおよしさんと金兵衛さんの娘さんは同い年よ」

「なにっ、おこんどのとか」

「あれ、おこんさんを知っているの」

「知っているもなにも、西広小路の今津屋どので仕事を頂いたことがあってな」

磐音に共通の友達がいたこともあって、女たちはすぐに気を許してくれた。入れ替わり立ち代わり四人の娘たちが茶を飲みに来ては、磐音とおしゃべりしていった。

一日の仕事はあっというまに終わった。

金的銀的の暖簾（のれん）が下りたのは、五つ半前のことだ。

朝次と女将のおすえが娘たちに日当（ひあて）を払い、ご苦労さんと送り出した。

「坂崎さん、すっかり女達の信用を得られたようですね」

朝次が笑い、おすえが、

「この部屋が見違えるようだもの」

と驚いた。

「なにもすることがないでな」

朝次は三百文を差し出すと

「明日からはちゃんと六百五十文をお払いしますからな」

と断った。

「親方、今晩は見習いでこざる。ご懸念なく。」

磐音が断ると。

「まあ、そう言わずに蕎麦でも食べていらっしゃい」

と掌に握らせた。

「明朝はいつ店開きにござるか」

「広小路は昼下がりにならないと見世物は駄目なんでねね、９つ半時分（じぶん）にきてください。」

「相、分かった、よしなに頼みます」

磐音は親方夫婦（ふうふ）に頭を下げると大包平を手にした。

二

金兵衛長屋に鰯の触れ売りが入ってきたのは、磐音が井戸端で顔を洗っている４つの刻限だ。

内職をしていたおんなたちがわいわいがやがやと集まってきて鰯を購った（あがなう）。

「一尾（いちび）いくらかな」

棒手振り（ぼてぶり）が磐音の顔を見て、

「浪人さん、**初鰹を買おうってんじゃねえんだぜ。鰯一匹といわれてもな**」

「ならば、五十文ではいかほどかな」

「今日は形がいいや、十五、六匹は買えるぜ。お前さん、丸干しにでもする気かい。」

「いや、ちと礼をしたくてな」

「なら、おまけしてやらあ」

どてらを着込んだ金兵衛が笊（ざる）を持って姿を見せた。

「坂崎さん、朝次んとこで仕事が見つかったかい」

「大家どののご推挙（すいきょ）で、なんとか職を得た」

「お前さん、仕官したわけじゃねえんだから。矢場の用心棒に雇われただけだよ」

「仕事は仕事でござる」

まあな、と返事する金兵衛に訊いた。

「幸吉どのの長屋をご存じか」

「ははあ、この鰯の礼に持って行こうと言う算段かい。律儀だな」

金兵衛は、唐傘長屋のどんづまりが幸吉の長屋だと言うと、

「おい、新次、鰯を持っていく先は食い盛りの餓鬼（がき）ばかりだ。たっぷりとおまけしろよ」

と棒手振りに指図した。

磐音は自分のために三匹を取り分け、残りの鰯を金兵衛の竹笊（ざる）を借りて盛った。

金兵衛が口を利いたせいで十五、六匹はありそうだ。

その足で唐傘長屋を尋ねた。

相変わらず傘を干してある木戸口を抜けると素顔（すがお）の娘が、

「あら」

と驚きの声をあげた。

「そうか、そなたの長屋だったな」

「幸吉どののお長屋はどちらかな」

「おしげおばあさん、幸ちゃんの友達が訪ねてきたわよ」

おきねが笑いながら、井戸端で洗濯する女に声をかけた。

振り向いたおしげの鬢（びん）に膏薬（こうやく）が張ってあるのが見えた。

「金兵衛さんとこの浪人さんだね」

磐音は竹笊の鰯を差し出すと、

「昨日、幸吉どのに結構なお仕事を紹介していただいてな、お礼に参った。」

「こりゃ、どうも」

ぺこりと頭を下げて竹笊を受け取ったおしげにおきねが、

「坂崎さんね、うちで働くことになったの」

と説明した。

「幸吉がそんなことをしたのかい、ちっともしらなかったよ」

おしげが嬉しそうに言う。。

「浪人さん、ありがたくいただきます」

と竹笊を差し上げた。

磐音が東広小路に行くと、白衣（はくい）を着た男たちが、水垢離ばで寒の流れに見をつけていた。年明け早々に大山参りに行く連中だという。

だが、矢場の金的銀的はまだ店を開けてなかった。

磐音は水垢離場之石段（いしだん）に腰を下ろして、沐浴の風景を見ていた。

久しぶりに飯を炊き、朝餉と昼餉を兼ねて、焼き鰯で三杯飯を食べて満腹（まんぷく）していた

師走（しわす）の日差しがのんびりと落ちて、なんとものどかだった。

水垢離場に猪牙舟（ちよきぶね）が近付いてきた。

舟には白衣のおんなが一人乗っていた。

（こんな水垢離もあるのんか）

女は沐浴する男たちと少し離れた場所に止めた舟から流れに入った。

凄みのある美人で、体に張り付いた白衣がなんとも悩ましかった。

「お待たせしましたね」

朝次の声が背からして、磐音が立ち上がった。

磐音は包平を部屋に置くと、脇差だけの格好でまずは表の掃除から自分の仕事を始めた。

「坂崎さんが私の仕事を取り上げなさったから、仲間のところを回ってくるとしましょう」

打ち水をする磐音に朝次が笑いかけながら、

「そのうち女たちも出てきますが、親切はいいが甘えさせちゃいけませんぜ」

と釘を刺した。

朝次が出たあと、矢場の掃除に取り掛かった。そこへおよしたちがぞろぞろとやってきた。

「おや、外回りは終わったのかい」

女達も加わった背出掃除は一息（ひといき）に終わった。

続いて商売道具の弓と矢の手入れだ。

お良たちは矢羽根（やばね）を調べて、傷んでいるものは新しい羽根に取り替えた。

矢場の半弓（はんきゅう）は、竹と木を何枚も張り合わせた（はりあわせる）戦用（いくさよう）の飛び道具と違い、柳や蘇芳（すおう）を使った。

楊弓と言うのはそのせいだ。

弦を調べ、弓本体に傷がついていないか調べた。

矢場では客が誤って弓を壊した場合は二百文、矢一本は七十文の損料を取られる仕組みだから、客入れ前の点検は綿密を極めた。

弓に弦が張り直されると、およしが矢を試射した。

八間先の的に向かって、半身に正座（せいざ）したおよしは軽やかに弓を引いた。すると矢羽根が風を切って的の真ん中に突き立った。

「上手いもんだな」

「そりゃ、五、六年もやってりゃこれくらいにはなりますよ」

およしが言い、磐音に差し出した。

「それがしに引けというのか」

「やってごらんなさい」

「本弓は引いたことはあるが、あまり得意ではなかったな」

磐音は言い訳をしながらおよしの射方（いかた）を真似て座った。

二尺八寸の弓に九寸の矢を番えて楊弓を引き絞ると実に軽い。

磐音は肩の力を抜いて三寸の的を狙って放った。

矢はおよしの矢の飛ぶ勢いより早く、七間半を飛んで土塁に突き刺さった。

「坂崎の旦那、肩にも腕にもまだ力が入りすぎてますよ」

「さようか」

磐音は肩をぐるぐる回して上体（じょうたい）を柔らかく保った。そして両腕を均等に引き分けるように絞って弦を放った。

「当たり！」

当たる前からおきぬが太鼓を叩いて知らせてくれた。

矢は三寸の的の端に突き立っていた。

「さすがにお武家さんだ、呑み込みが早い。これならさ、何日か稽古すればいい腕になるよ」

およしがほめてくれた。

矢場の楊弓は武家の三枚打四本竹造りの豪弓とは全く異なるもの、それが磐音の認識であった。

広小路に人が増えて、矢場の金的銀的も店開きました。となると、無粋（ぶすい）な男は奥に引っ込むしかない。

親方の朝次が店に戻ってきたのは８つ半時分（じぶん）になっていた。

「坂崎さん、あいつら、富岡八番宮に出やがった」

「泣きを見ることになった矢場が出ましたか」

「ああ、私の知り合いが切り餅を持って行かれた。暮れに二十五両は痛かろう」

「なんと」

「ここにも必ず姿を見せますよ。そのせいで坂崎さんの稼業はすんなり決まった」

十三軒が五十文ずつ出し合っての用心棒稼業だ。

「喜んでいいのか悲しんでいいのか。それがしのしごとがいらぬのが一番ですからな」

「それでは坂崎さんのおまんまの食い上げだ」

と苦笑していた朝次は、

「こういう見世物小屋は、年の瀬から松の内が稼ぎ時です。奴らが動くとしたら、まずこの時期（じき）を狙う」

「ならば気を引き締めて控えておるとするか」

明日は大晦日、商人も職人も最期の仕事に追われて、日中の客足はよくなかった。だが、夕暮れ過ぎになって、急に客が押しかけて金的銀的は忙しくなった。

朝次が仲間の店を時折見回りに行ったが変わった様子はなかった。

「ああ、嫌だよ。大津屋の隠居ったら、あたしの尻ばかり振りまくるんだもの」

およしが控え部屋（ひかえべや）に来て、磐音に嘆いた。

「そう申すな。男と言うもの、きれいなものを見るとつい手で触れたくなるものだ」

「あら、坂崎さんもそうなの」

「いや、これは男の気持ちだ」

矢返しの女たちの色気（いろけ）を目当てに店に通う客が大半なのだ。

「坂崎さんの言う通りだわ、およし姉さんがきれいだから、隠居さんも振りたがるのよ」

「おたつちゃん、そうはいうけど、どうせふられｒなら坂崎の旦那のように若いほうがいいよ」

「およしどの、若くてもこちらは文無し、なんともならぬ」

「若さと金とを比べれば、なにはなくとも山吹（やまぶき）色にやっぱり軍配（ぐんばい）。さあ、一稼ぎしてこよう。」

矢返しは給金の他の客からの心付けが実入りだから、矢を取りにいくとき蹴出しから白い足を見せたり、胸元（むなもと）を覗かせたりした。

好き放題なことを喋りあった女たちはまた店に出ていき、男客（おとこきゃく）の好色（こうしょく）に応えた。

磐音もなんどもか朝次と一緒に仲間の矢場回りをして、そのついでに東広小路に出ていた屋台（やたい）の菜飯屋で夕餉を摂った。

この夜、金的銀的の明かりが落ちたのは４つに近った。

結局、五人組は日が押し広小路には現れなかった。

磐音は同じ方向のおきねと一緒に竪川を渡って深川六間堀町に戻った。

金兵衛長屋の木戸口が見えるところまで来るとなにか騒がしい。

「何かありましたか」

長屋の住人に声をかけた。

「大変だ、旦那のところに泥棒が入った」

と左官の常次（つねじ）が行った。

「泥棒でござるか、それは困った」

「そりゃ困るさ」

「いや、泥棒が気の毒でな、盗まれる者など何もない」

声を聞きつけた金兵衛が姿を見せた。

「そんな呑気な話じゃなさそうだぜ」

と言った。

その傍らには金兵衛の娘、西広小路の両替商（りょうがえしょう）今津（いまづ）屋の奥向き（おくむき）の女中（じょちゅう）をしているおこんがいた。

「おこんさん、年の瀬で戻っておられたか」

「坂崎さん、そんなことより長屋みてよ」

おこんに言われて自分の長屋の敷居（しきい）を跨いだ（またぐ）。

「おやおや」

わずかばかりの持ち物、夜具や炊事（すいじ）道具がひっくり返り、畳を上げて床下（ゆかした）を調べた様子もあった。それに壁際に置かれた箱の上の三柱の位牌（いはい）も転がっていた。

磐音は乱雑に散らかされた部屋に上がると、まず位牌を鰹節（かつおぶし）屋から貰い受けてきた木箱（きばこ）の上に並べ直した。

おこんと金兵衛親子が複雑な思いでその様子を見ていたが、金兵衛が長屋の住人に、

「当人が戻ってこられたんだ。盗まられたものもなさそうだ。もうそれぞれ長屋に引き上げな」

と命じた。

「うちに泥棒に入ってもな」

再びを傾げた磐音におこんが言った。

「常次さんが見かけているの。お侍ですって」

「武家じゃと」

「それも浪人者ではなく。大名家にお仕えするようなお武家様が二人…」

（なんと…）

もしそのような不心得者がいるとすると。

（豊後（ぶんご）関前（せきぜん）藩の者か）

「坂崎さん、もしかして旧藩と関わりがあるのでは」

金兵衛が言い出した。

「だが、私がこの金兵衛どのの長屋に住んでいることを承知している旧藩の者はおらぬ。一つだけ考えられるとすれば、勘定奉行金座方の日村綱道（ひむらつなみち）様の線だ」

さきごろ、磐音は今津屋が南陵二朱銀騒ぎのとき、日村と面識を持った。

その日村は、磐音の剣の師匠、神田三崎町の直心影流道場主の佐々木玲圓と知り合いだった。むろん佐々木は磐音の旧藩とつながっていた。

それを知った日村が佐々木の伝言を伝えたこともあった。

「いいわ、坂崎さんの住まいを佐々木先生に話されたどうか、日村の旦那に確かめてみる」

のみこみの早いおこんが請け合った。

「でもさ、なぜ襲われるの。坂崎さんが藩から金目（かねめ）のものを持ちだしたふうはないし」

「金目のものがあるくらいなら、家賃を貯めるようなことはいたさぬ」

「それもそうね」

おこんがあっさり納得し、ふいに話題を変えた。

「坂崎さん、およしちゃんの矢場で仕事をしているんですってね」

「幸吉どのが紹介してくれてね」

「どうも化粧の匂いがすると思ったわ」

磐音が袖を鼻に持って言って匂いを嗅いだ。

「匂いなど何もせぬぞ。それに、それがしは一日六百五十文で雇われた用心棒にござる」

「矢返しの娘がたくさんいるんでしょ」

「およしさんの他におきね、おたつ、おうめさん三人いるが、どれも可愛い娘ばかりだ」

「どうも鼻の下が長く伸びていると思ったわ」

「馬鹿野郎！サカザキ三に悋気してどうする」

「あらっ、まあ。お父さん、まだいたの」

おこんが父親を振り返った。

「今度は邪魔者扱いか」

金兵衛が怒って出て行った。

「これじゃあ、寝ることもできないわ。片付けましょう」

おこんはさっさと片付け始めた。

磐音は畳を元に戻しながら考えに落ちた。

ふとおこんに話してみようかと考えた。

「おこんさん、位牌の人物が誰か聞いてくれるか」

おコンが頷いた。

「河出慎之輔、小林琴平とそれがしは、この４月下旬、江戸藩邸の勤番を終え、国許（くにもと）の豊後関前藩の城下に辿り着いた…」

悲劇はその夜に起こった。

三人の内、所帯持ちは慎之輔だけだった。

妻は琴平の妹の舞だ。

その舞が、

「不義密通をしていた…」

と帰着したばかりの夫讒言（ざんげん）する者があって、その言葉に踊らされた慎之輔が舞を手討ちにしてしまった。

錯乱した慎之輔は義兄（ぎけい）である琴平に、妹の亡骸を引き取りに来いと使いを寄越した。

藪から棒（やぶからぼう）の話におっとり刀で河出邸に駆けつけた琴平は、あまりにも思慮のない慎之輔に怒り、切り捨てた。さらに舞を不義をはたらいたと噂を撒き散らした藩上司の次男坊も始末した。

藩に新しい息吹を吹き込んで改革をする夢に燃えて帰国した三人の運命は、一夜にして急転（きゅうてん）、瓦解した。

藩ではこの刃傷沙汰の始末に混乱した。

議論の末に琴平への上意討ちが決まった。

磐音は自ら志願して琴平の討ち手になった。真相を自らの口で伝えたかったからだ。それを聞いた琴平は、磐音との真剣勝負を望んだ。

死闘の末に生き残ったのは坂崎磐音だった。

三柱の位牌を手にした磐音は、おこんに三人の幼馴染を襲った悲劇を告げた。

おこんは行きを呑んで磐音の話に聞き入った。

しばらく沈黙していたおこんが思い切ったように訊いた。

「国許には坂崎さんの帰りを待っておられる方がいたのね」

「確かにそれがしには祝言をあげる相手がいた。小林琴平と舞どのの妹、奈緒どのだ…」

おこんが青い顔で小さく頷く。

「だがな、藩の命令とはいえ兄の琴平を斬ったのはそれがしじゃ。それが平然として奈緒どのとの祝言をあげられるわけもない。藩に暇乞い（いとまごい）をして、密かに国許を出てきた…」

「なんということなの」

おコンの双目（そうめ）に涙が盛り上がって流れた。

「奈緒様には話したの」

「奈緒どのに話す暇などなかった。それにどの面下げて（どのつらさげて）あえばいい。それがしは兄を斬った男だ」

おこんが叫んだ。

「おれらは旧態依然とした藩政を変えようと話し合って、国許に帰った。それが一夜にして終わった。そればかりか幼馴染を死なせ、妻や国許を失った…」

狭い長屋に思い沈黙が支配した。

膝に置いていた位牌を箱のうえに戻した。

白木（しらき）の位牌に三人の名前を書いたのは磐音自身だ。。

「国許では三人の他にたくさんの犠牲者が出た。その藩が何用あって、それがしの身辺（しんぺん）に手を伸ばしてきたか」

磐音はつぶやくように自問した。

「泥棒まがいの事をして坂崎さんの長屋に入り込んだのは、間違いなく藩の人間だわ。それしか考えられない」

おこんが言い切った。

「問題は、坂崎三の知らない事が藩の内外で起こっていることよ」

「それがしの知らぬこと…」

「坂崎さんは事件が終わったと思っている。でも、終わってなんかいないのよ。だってこんな騒ぎが覆ったんですもの」

磐音は奈緒のことを、父の正睦（まさよし）のことを頭裏に思い描いた。

「坂崎さん、奈緒様のことを大切になさってね」

「もう終わったことだ」

「終わってなんかいない」

顔に涙の後を残したおこんが磐音を見つけた。

「いや、すでに決着がついていおる」

「坂崎さんの唐変木（とうへんぼく）！奈緒様は今も坂崎さんに助けを求めているのよ」

おこんはそう叫ぶと長屋を飛び出していった。

三

安永（やすなが）元年の大晦日、あと二刻ほどで除夜（じょや）の鐘が江戸の町に響こうという頃合、そのものたちはふらりと金的銀的の店に姿を見せた。

加賀友禅（ゆうぜん）をぞろりと着た女おかるは、頭を櫛巻きにして、匂い袋（においぶくろ）を袖に忍ばせていた。

連れは宗匠風のなりをした風流亭円也だ。

「旦那にお目にかからしてくださいな」

無言のうちにうなずいたおたつは奥に駆け込んだ。そのことを知らされた朝次は磐音に頷くと店に出て行った。

二人連れの男女は弓を手に弦を調べていた。

「いらっしゃい」

朝次が明るく声をかけた。

「そなたが主の朝次さんかな」

隠居がののんびりした口調で話しかけた。

「へええ、私が主にございます」

「もはやお分かりと思うが、結改を所望（しょもう）したい」

「お前様方が江戸の矢場を荒らし回る五人組の片割れですかい」

「荒らし回るとは穏やかではないな。断っても一向にかまわぬが」

「その代わり看板を降ろせとおっしゃるんで」

隠居の円也はただ声もなく笑った。

「うちも東広小路出矢場を開いて長い。矢場荒らしを恐れて断たとあっては、仲間に顔向けもできない」

「受けるというのか」

「ただひとつ条件がある」

「ほう、なにかな」

節巻きの女は選んだ弓の弦を白い指先で弾いていた。

磐音はその女が昼間水垢離場に舟で沐浴にきた女だと気付いた。

五人組は用意周到に金的銀的の事を下調べして勝負を挑んでいた。

「東広小路には十三軒の矢場がある。勝ち負けにかかわりなく、二度と姿を見せぬと約束してしてもらいたい。

「主どの、我らは客として参っておる。それを、一度は許すが二度は駄目だと御託を並べるなど、商人（あきんど）にあるまじき言動じゃな。それに最初から負けを認めている様子、そんな店相手に勝負を願ってもおもしろくない。おかる、もどろうか」

隠居を立ち上がるふうを見せた。

「両国東広小路の金的銀的は、矢場でも評判の店と聞きましたが、隠居さん、大したことはございませんね」

おかるも捨て台詞を吐いた。

「ご隠居三、お日kルサン、そこまで言われては朝次の顔が廃る（すたる）。受けようか」

「そうこなくちゃ」

女がすぐに応じ、

「二百本賭金総取り勝負」

と言うと、胸高（むねだか）に締めた帯から切り餅（きりもち）二つを出した。

五十両の大勝負だ。

矢返しの女たちがごくりと唾を飲み込んだ。

朝次がおすえを見た。

お陶が顔を横にふりかけて諦め、用意していた賭金を持って来るために奥に立った。

その間に勝負の場が整えられた。

「ご隠居、お前さんかい、おかるさんかい」

「ここは若い者に任せましょうかな」

五人組でも一番腕が立つというおかるを隠居は指名した。

朝次は四人の矢返しの顔を見回した。

「およし、おまえしかいねえ」

「あたしにや、こんな大勝負はできないよ」

腰の引けたお良は三人の仲間たちに助けを求めた。

おうめとおたつも後込した。後込みした（しりごみする）

。

「旦那、私が代わります」

おきねが言い出した。

およしについで腕がいいのがおきねだった。

「頼む」

朝次はそれだけ言った。

おうめとおたつが店の暖簾を下ろし、戸を締めた。

矢場のあちこちに百目蝋燭（ひゃくめろうそく）がともされた。

百両が三方（さんぼう）の上に置かれた。

おかるとおきねが一間を置いて座った。

競射は二十本ずつ交互に放つやり方で、一本でも多く当てた方が百両の総取りだ。

先射は客のおかるだ。

すでに蘇芳（すおう）の弓を選んで板おかるは、十本ずつ並べた矢立てを一つ引き寄せ、七間半先の的を見た。するとどこか自堕落な色気を放っていたものが一変した。ピーンと背筋が伸びて五体が引き締まった。

おかるはや矢立て（やたて）に手を伸ばした。一度に二本の矢を右手に掴んだおかるは、流れるような動きで半弓に矢を番え、ほとんど狙う様子も見せずに放った。そして、放った時には次の矢を番えていた。

七間半野空間を二本の矢が前後して飛び、三寸の的の真ん中に次々に突き立った。

おきねがぶるっと見を震わせた。

おかるはさらに二本の矢を打ち放ち、さらに二本と重ねた。

動きにまるで無駄がない。

遅滞がないぶん力（ぶんりょく）がかからず、矢は正確に的を射抜き続けた。

二十本の矢は三寸の的の真ん中に集中していた。

「二十筋命中にございます」

おうめが叫ぶと太鼓を軽く叩いた。

おたつが新しい的に替えた。

紅潮（こうちょう）した顔のおきねは膝に愛用の柳の弓を置いて、しばらく両眼を閉ざして気を落ち着けた。

目を開けた。

手探りで屋を一本選び、弦に番えた。

半弓を頭上からゆっくりと下ろしてきて、眼前で止めた。止めた瞬間、矢を放った。

矢は的の真ん中近くにあたった。

矢場にほっとした吐息が流れた。

おきねは集中するように自分の心を律してやを射続ける。

「二十筋、命中にございます」

おきねの矢は的にあたったがばらつきがあった。が、二十本が命中したことでおきねの表情も安定した弓を引き続けた。

三回目、四回目、双方ともに互角の技を見せた二十本を当てた。

おきねの矢も三寸の的の真ん中に集中してきた。

五回目、百本目に入った。

おかるは右手の指の間に四本の矢を挟むと、次々に速射した。それが五回繰り返され、一瞬の間に二十本を撃ち当てていた。

おきねの顔に再び緊張が走った。

五回の十三本目、的を僅かに外れて土塁に突き立った。

「沖根ちゃん、これからよ」

おうめが激励した（げきれい）。

小さくうなずいたおきねは必死の形相で矢を放ち、的に当てた。

小さな安堵（あんど）の吐息をおきねがついた。

が、十七本馬都を外し、その回は十八本で終わった。

「ここにしばらく休憩をとります」

朝次が宣告した。

おかると隠居の挑戦者は平然としたものだ。

供された茶を悠然と飲んでいた。

百本中二本の矢を外したおきねは、

「ちょっと外の空気を吸ってきます」

と大川端に出て行った。

磐音はしばらくおいて外に出た。

おきねは放心したように水垢離場を見つめていた。

「おきね、すごいもんだな。百本射って外したのはわずかに本か」

磐音が砕けた口調で話しかけた。

振り向いたおきねは、

「もう射てない」

と泣き顔で言った。

「なあに相手も人間、失敗することもあろう。勝ち負けは時の運だ」

「親方が五十両も賭けていなさるのよ」

「金のことは親方に任せるのだ。そなたは自分を信じて、無心に射てばいい。」

「怖い」

とおきねは呟いた。

「そなたの後ろには親方も朋輩（ほうばい）も控えておる」

おきねは両手で頬をぱちぱち叩くと。

「やります」

と言い残して店に消えた。

磐音は両国橋に足を向けた。

行く先は両国西広小路、米沢（よねざわ）町に店を構える両側商の今津屋だ。

磐音は師走も押し詰まった刻限に今津やを訪ねて、主の吉右衛門（きちえもん）に無理な願いを頼もうとしていた。

それが無茶な頼みであることは承知していた。また、叶えてもらえる保証もなかった。だが、手立てはそれしか浮かばなかった。

（間に合えばよいが…）

今津やは大戸を下ろしていたが、臆病窓から光が漏れていた。

窓に顔をつけた磐音がは、

「由蔵（よしぞう）どの」

と両側商の老分番頭の名を呼んだ。

両側橋の上に、安永（あんえい）元年、大晦日の月が青く落ちていた。

もう四半時もすれば除夜（じょや）のかねが鳴り響く。

橋上（きょうじょう）には人影がなかった。

東広小路の方角（ほうがく）から３つの人影が現れた。

矢場荒らしのおかると隠居の風流亭円也。それにどこにくぐんでいたか、着流しに細身の刀を縦にさし落とした若衆姿の有馬数馬（ありまかずま）が加わっていた。

３つの影が橋の中ほどに差し掛かったとき、追いすがってきた女がいった。

おきねだ。

「ま、まってください」

３つの影が振り向いた。

「お金を返してください」

矢場あらしは誰も答えない。

「五十両の代わりに、あたしを吉原にでも品川でも売ってください。親方に五十両を返してください。お願いします。」

「ふざけんじゃねえ。勝負はすでについたんだ、おめえの責任じゃねえさ」

隠居は伝法な口調で答えるとくるりとみを翻そうとした（ひるがえす）。

その背におきねが追いすがろうとした。

数馬の手がおきねの髷を乱暴に掴むと。

「のぞみなら深川の地獄に叩き売ってやってもいいぜ！」

と橋の上につき転ばした。

そこへ朝次が駆けつけてきて、

「おきね、もういい。もういいんだ」

と自分に言い聞かせるようにつぶやくとおきねの手を取った。

「金的銀的、看板がおろしづらきゃあ、また年明けにも押しかかるぜ」

隠居の円也は言ってくるりと背を向けた。

その前に一つの影が立ち塞がった。

「てめえは何だ」

数馬が訊いた。

「それがし、東広小路の矢場十三軒の用心棒でな」

「ほう、用心棒かい。今までどこに身を潜めていやがった」

「ちと用立てに行っておったのでな」

「何のようだ」

「そなたらは矢場に無法の勝負を申し込んで、金的銀的の親方に勝負を受けてもろうた。今度はそれがしのほうから勝負を願おう」

磐音は二十五両の切り餅（きりもち）を二つ指し示した。

「両側商の今津屋どのから立った今用立ててもらった五十両、正真正銘の小判（こばん）五十枚でござる」

磐音の言葉があくまでのんびりとしていた。

「おめえは俺たちに刀勝負を挑もうというのかい」

隠居の円也が笑った。

「さよう。三人にてもかまわぬが」

五十両を橋の欄干のしたに置いた。

「大言壮語（たいげんそうご）を吐いたものだぜ」

隠居が若衆を見た。

「隠居、おかる、この世知がらい大晦日の両側橋に五十両が転がっているんだ。。もらっていかぬ手はあるまい」

数場が笑うと磐音の前に進み出た。

隠居が懐から袱紗（ふくさ）包を出すと、切り餅二つを磐音の五十両の横に並べた。

「勝負は一対一でよいのじゃな」

磐音が念を押した。

「手にあまる分けもねえ」

数場がうそぶいた（うそぶく）。

「浪人、おめえの流儀（りゅうぎ）を訊いておこうか」

「直心影流佐々木玲圓門下にござる」

「なにっ！神田三崎町の佐々木道場か」

数場の血相（けっそう）が変わったのを橋の袂（たもと）の常夜灯が照らし出した。

「おもしろい」

数場は腰を沈めた。

居合（いあい）が得意なのか、抜き打ちに磐音を倒す気だ。

磐音もわずかに右足を踏み出した構えで立ち向かった。

間合いは二間。

一歩でも踏み込めば、死地に入った。

不動の対峙が始まった。

月明かりのした、二人は微動だにしない。

大川を筑波（つくば）下ろしが吹き抜けて、数場の裾をばたばた揺らした。

川面（かわづら）を荷足り船（にたりぶね）でもいくのか、船頭（せんどう）の話し声と櫓（ろ）の音が気怠く（けだるい）響いてきた。

数馬ののっぺりした顔に薄く汗が浮かんで光った。

磐音は右足を上げ、橋の板を軽く叩いた。

とーん

それに誘われるように数馬が突進してきた。

低い姿勢から細身の刀を抜き、迅速にも磐音の胴を抜いた。

磐音も迎え撃って走り、大包平二尺七寸を抜き上げた。

二剣は虚空（こくう）で絡みあった。

きーん！

鋼（はがね）の音が両国橋二響き、数馬の細身の剣が折れ飛んだ。

「おっ！」

数馬は折れた剣を手に前方へ走り抜けようとした。

磐音は片足立ちに反転すると包平を惹きつけ、間合いの外に逃げようとしながら脇差に手をかけた数馬の背に言った。

「勝敗は決した、金をいただこう」

磐音は欄干のしたの金子（きんす）に手を伸ばした。

殺気が走った。

振り向いた磐音の視界に脇差を抜き差しにした数馬が迫っていた。

右手に下げていた包平が気配もなく擦り上げられた。

数馬の脇差をかわして大帽子が数馬の首を撫で斬った。

びゅーっ！

血飛沫（ちしぶき）が夜空に飛んだ。

数馬は身を捩るように蹌踉めいて（よろめく）後ずさりし（あとずさり）、反対側の欄干に上体をぶつけ、両足を虚空（こくう）にばたつかせると眼下の流れに落ちていった。

「やりやがったな！」

おかるが懐の短刀（たんとう）を抜こうとした。

そのてを隠居の円也が抑えた。

「この礼は必ず返すぜ」

二人は足早に西広小路へと姿を消した。

磐音は血振りをして、見物の二人を振り返った。

朝次戸おきねが放心したように立っていた。

「親方の五十両ですよ」

切り餅二つを手に握らせると、残りの五十両を磐音は懐にいれた。

「今津や三で借りて参ったのだ、返してこよう」

両国橋の西詰（にしずめ）に歩き出した磐音の背に朝次が、

「坂崎さん、ありがてえ」

と声をかけ、伏し拝んだ（ふしおがむ）。

両国橋に除夜の鐘が響き、おきねの鳴き声が混じった。

激動の一年がくれようとしていた。